

置が見えてくると同時に、学習の関連のさせ方についてのアイデアがわいてくる。

## 8 指導計画の作成の工夫

特色ある教育課程の編成を進めるためには、単純な指導計画の寄せ集めでは、その意図が表現できないことが多い。ねらいを生かした単元構成の示し方や指導計画の表現形式を工夫したい。図は、根岸小学校の教科間関連を図った単元構成図である。この構成図には、学習活動相互の関連と同時に、そこで育成される力の内容と関連が示されており、全体としてどのような学習が行われるのかがよく分かる。

単元構成や指導計画の作成にあたっては、ねらいを生かした表現形式を工夫する

## 9 その他の留意点

その他特色ある教育課程編成の手順や方法について、留意点をあげる。

### (1) 検討・研究組織の工夫

どのような特色を出すか、どのような教育課程を開発するか、その目的と内容によって研究組織の姿も異なったものになる。また、準備期における組織と、完成・試行期および評価・再検討期における組織とは異なったものになることもある。いずれにしても、いつまで何をするのか、期間を定めて段階的に作業を進めていくことが必要であり、そのためには学校長や教頭、研究主任などの粘り強いリーダーシップが求められる。

### (2) カリキュラムのタイプ

近年の学校カリキュラムは、体験や活動の重視、教科間関連や総合化の動きのなかにあり、そのような取り組みを行う学校が増えている。カリキュラムの編成にあたっては、自校のカリキュラムがおおよそどのタイプになるのか、研究しておきたいものである。ちな

みに、これまで一般に分類されてきたカリキュラムの類型は、教科カリキュラム、経験カリキュラム、広領域実カリキュラム、相関カリキュラム、融合カリキュラムなどである。

### 〈参考資料〉

- (1) 「平成8・9年度研究紀要 輝き、ひびき合う個性——学習のネットワーク化を通して——」東京都台東区立根岸小学校、平成9年11月。
- (2) 平成9・10年度川口市教育委員会研究委嘱 中間発表研究紀要 環境教育に関する研究「豊かな感性を持ち、より良い環境をめざして、自ら行動のできる生徒の育成」埼玉県川口市立小谷場中学校、平成9年10月。

## 解説キーワード

### ■子ども像

子どもをこのように育てたいというイメージが子ども像である。学校教育に限らず教育が行われているところではどこでも、何らかの子ども像が描かれているといつてよい。しかし、このイメージがはっきりしている場合と無自覚な場合がある。

- 子どものよい面をさらにのばす——教育課程編成を考える場合は、今までの教育課程が描かれていた子ども像を吟味・検討し、新しい子ども像を提起することが必要になる。その場合、それまでの子どもの姿のよい面を引き出し、もっと深めたらどうなるかという前向きの方角で考えたいものである。
- これからの社会で求められる資質や能力の観点を生かす——子どもはこれから何十年という未来を生きていく旅人である。将来社会からみた資質や能力の観点を、子ども像のなかに反映させることを考えたい。

## 2

# 地域の実態を生かす 教育課程の編成

静岡大学教授 馬居 政幸

### 実践に生かすポイント

- ①急速な社会の情報化、国際化、少子高齢化で、地域という言葉が指し示す事象（定義）を一義的に規定できなくなっている。
- ②教育課程編成の前提である“地域の教育力”とは、すでにあるものとしてではなく、「地域づくり」を通して“創造するもの”である。
- ③地域の特性を生かした教育課程とは、それぞれの学校で、学区という地域で生活する子どもたちの成長にふさわしい独自の教材を開発することである。

## 1 地域への視点

地域との連携やその教育力を学校の教育課程に生かす重要性が指摘されて久しい。数多くの実践がなされてもいる。その代表が小学校低学年の生活科や中学年の社会科地域学習であろう。さらに、新学力観に基づく体験的な活動への理解の深まりとともに、高学年の産業学習や歴史学習をはじめ、様々な教科、道徳、特別活動において地域の“ヒト、モノ、コト”を積極的に活用した授業づくりが行われている。

教師が子どもたちとともに地域に出て、新たな学びの場の創造を試みる実践も多い。小学校と比較して教科指導の色彩が濃い中学校教育においても、選択履修幅の拡大に伴って、地域の歴史や産業を継続的に調査する学習活動を取り入れるなど、地域素材の教材化を進める学校も少なくない。

他方、地域を舞台にした学習は生涯学習の制度化に伴い、学校の外のまさに地域の人たち自身による多様な学習活動が全国各地で実践されている。地域という世界に関する論議

も盛んである。地域産業、地域経済、地域政治、地域史、地域の教育力、地域に開かれた学校、地域医療など多種多様であり、その学問分野も地理学、経済学、社会学、歴史学、教育学、心理学、医学など多岐にわたる。

このような地域への関心の高まりの背景として、急激に進む社会の情報化、国際化、少子高齢化など、かつてない変動期にあって、人と人が共に生きる場を再構築することを意図する運動や活動、あるいは行政施策の推進にとって、地域は問題を見出す場であるとともにその解決を託す場ともなっていることがあげられる。ただしこのような地域の位置づけは、問題の原因となる場に、問題の解決を求めるという矛盾に陥る危険性がある。そして、このような混乱が生じる原因は、地域という言葉が指し示す事象（定義）を一義的に規定できなくなっていることである。

学校教育も例外ではない。たとえば、従来、「地域で」学ぶのか、「地域を」学ぶのかという問題が論議されることが多かった。地域は教育（学習）という「行為が生じる場」なのか、教育（学習）すべき「内容を求める場」なのか、という対立である。だが両者は地域

表1 産業別人間関係(地域)の特性

産 業	関係の契機	人間・集団との関係の特性
第一次産業中心の社会	地縁・血縁	同質・身分・伝統を前提とした公私未分化の非選択的な人間関係
第二次産業中心の社会	社縁・学校縁	同質・平等・競争・利害を前提とした集団への実質的に非選択的な帰属関係
第三次産業中心の社会	情報・知縁	選択の契機を介在させた部分的人間関係(横並び階層化or棲分or共生関係)

という言葉で指示する事象については合意している。「で」と「を」の違いは、地域への「取り組み方」の相違に焦点を合わせたものであって地域自体の相違ではない。

しかし、今日の問題は地域に対する合意自体が揺らいでいることにある。それ故、まず問うべきは、「地域」という言葉で示そうとする事象自体である。ただし、一般に特定の事象に様々な分野の関心が集中する場合、その事象が従来の常識では理解できなくなり、新たな解釈が必要になった場合が多い。その意味で、定義の曖昧さは、対象の多面性や可塑性を反映したものである限り、探究すべき価値の豊穡さを示唆していると考えられる。だからこそ、「地域の実態を生かす」ことが教育課程編成の課題になると考える。

そこで次に、旧来の常識から自由になって、地域という言葉で指し示す事象の実体を問い直す際に必要な視点を提起したい。

## 2 地域が示す事象とは

表1は産業構造の相違による人と集団相互の関係の特色をまとめたものである。

農業を代表に第一次産業中心の社会では、生まれ育った「土地(地縁)」とともに生活する「家(血縁)」が、そのまま人間関係の絆を形成し、個人による「選択」の余地は非常に少ない。所属する集団から独立した個という人間のあり方自体がないともいえる。

それが近代的価値の浸透と社会の工業化の

進行にともない集団から個人が分離する。すなわち、「自由」を「競争」に、「平等」を「機会」に置き換えた社会制度としての「学校」による社会移動を介して、一定の目的に基づき組織した「会社」を代表とする「職場組織」を「選択」し、そのなかで人間関係が形成されるようになる。そこで原則は、従来の地縁や血縁からは自由に自分の所属する集団を「選択」できることである。

だが日本では、義務教育は学区制という居住地域に基づく就学義務とセット。学校選択は私学に進む少数者にしか許されない。高校・大学の選択も義務教育での成績でコースを決定される傾向が強い。加えて、様々な社会調査が指摘するようにコース選択の可否が勉強部屋や家庭教師や塾の質の高さに依存し、それが親の収入や学歴と相関するとすれば、選択の幅は狭いといわざるをえない。さらに、学(校)歴とリンクした企業選択、あるいは昇進・給与システムに規定された職場という集団の絆はますます選択の幅を狭くする。

もともと、このような非選択的な社会関係を強制するシステムは第三次産業の増加とともに機能不全になることを避けえない。三次産業下の人間関係の「縁」は「情報・知識」だからである。その特性は常に選択の契機を内在した非常に流動的(可変的)な関係。その象徴がマウスとキー操作のみで世界中の仲間とコミュニケーションする「インターネット上」のシチズン(市民)すなわち「ネチズン」と称する人たちの誕生である。また、身近な

事例として、電話で遊ぶ場と時間のアポイントをとり、自転車や車で仲間のところへ出かける子どもたちの人間関係があげられよう。

## 3 教育の課題は

現代が三次産業化した社会であり、その特色が「情報・知縁」であることは理解できよう。だが、現代社会において地域という言葉が指示する事象を考えるうえでより重要なことは、上記三種の人間関係のパターンが同一の空間(地域)に多元的に併存していることである。

たとえば、町内会の活動に生きがいを持つおじいちゃんと家族や親戚を大事にするおばあちゃん(地縁、血縁)、会社を最優先するお父さん(社縁)と公民館で知り合った趣味の仲間と活動するお母さん(知縁)、家のある地の学区の小学校に通学する子どもたち(学校縁)と彼ら彼女らを教えるために学区外から通勤する先生(社縁)、これらはみんな一つの学区という地域のなかで営まれていることを忘れてはならない。

もう一つ重要なことがある。それはこの三種の人間関係に優劣はないこと。すなわち、どれか一つに統合するのではなく、それぞれの独自性を生かしつつ相互に知り合う「縁」を創造することが最も重要な課題である。いかにいえば、多元的な現実を多元なままに相互に結んでいく(ネットワーク化)ことが「情報・知識縁」の最も重要な働きである。

そして、このような異質な者の間にコミュニケーションが生じる過程こそ今日的な課題としての「地域づくり」の過程である。その意味で、教育課程編成の前提にある「地域の教育力」とは、すでにあるものとしてではなく、ここにいう「地域づくり」を通して「創造するもの」である。

すなわち、子どもたちが自分の日常生活のなかで交わる様々な人たちとの間に、上記の意味での「地域づくり」の「縁」を創造する

試みこそが、「地域の実態を生かす教育課程」が目指す課題と考える。

だが、これまで学校は一次産業の人間関係のみで地域住民像を描いてこなかったか。非選択的な地縁・血縁のみで結びつく世界として「地域」を捉えてこなかったか。

人間は社会事象を原理的には相対的なものとしてしか認識できない。他方、農業(前近代)社会から工業(近代)社会への転換を一元的に進行させるために設けられた制度が日本の学校であった。

だが今日、たとえ学校が一元化を意図したとしても、学校の外で加速度的に進行する社会の高度情報化により、原理的ではなく社会的現実として日常生活の多元化を避けえない。その結果、学校教育に求められる最も重要かつ困難な問いは、その制度本来の性格を改変しても、多様性を前提とした「ヒト、モノ、コト」とのかかわり方を子どもたちのなかに育成するための方途である。それが「地域の特性に応じた」というフレーズにこめられた意図と考える。

しかし、上述したように学校は一次産業的人間・地域観に基づく大人(年配者?)にとつての地域に子どもを同化させることを優先してこなかったか。あるいは、教師が用意した課題を、教師が事前にピックアップした地域の事象に関する知識のストック(副読本)を通して、子どもに同意させることを目的に進めてこなかったか。

「地域に根ざす」「地域で学ぶ」「地域を学ぶ」と言い方は様々なだが、いずれも教え学ばせることに急で、非選択的な地縁・血縁・社縁・学校縁的な視点から自由な地域観に基づいた、子ども一人ひとりの学校の外の日常生活を内在的に理解した立場からの実践に出会う機会は少ない。

したがって、「地域の実態を生かす教育課程の編成」として最も重要かつ基盤となるのは、教師自身が子どもたちと学校の内外の日常性を共有し、子どもの現実を支える

「これからの学校教育においては、(1)各学校において、地域や学校、幼児児童生徒の実態等に応じて、創意工夫を生かした特色ある教育を展開できるようにすることが大切である。

(2)そのため、教育課程の基準については、各学校段階や各教科等の特性に応じて、目標や内容を複数学年まとめて示すなど内容等の示し方を大綱化したり、日課表や時間割を各学校が一層工夫を生かして編成できるようにするなど1単位時間や授業時数の運用の一層の弾力化を図る必要がある。また、選択学習の幅を拡大するとともに、「総合的な学習の時間」を創設し、各学校の創意工夫を生かした教育活動が一層展開できるようにする必要がある。

(3)また、各学校においては、幼児児童生徒が家庭や地域社会において行った体験や活動を生かした指導に努めるとともに、家庭や地域社会の人材・施設や様々な活動との連携を図った特色ある教育活動を展開する必要がある。このようなことを通じ、学校と家庭・地域社会が十分連携をとるとともに、開かれた学校づくりを一層推進することが大切である。

「教育課程審議会による『教育課程の基準の改善の基本方向について(中間まとめ)』平成9年11月17日)「I 教育課程の基準の改善の基本方向」の「1 教育課程の基準の改善の基本的考え方」〔(2)教育課程の基準の改善のねらい〕「④各学校が創意工夫を生かし特色ある教育を展開すること」より

様々な人と人の結びつきとしての地域とコミュニティでできるネットワークを張ることに挑戦することである。

このことを前提に教育課程編成上の具体的な課題を、教育課程審議会の「教育課程の基準の改善の基本方向について(中間まとめ)」の「教育課程の基準の改善の基本方向」にあげられた「各学校が創意工夫を生かし特色ある教育を展開すること」(表2)をもとに提起したい。

#### 4 教育課程の編成のために

まず表2の(1)では、「各学校」による「創意工夫を生かした特色ある教育」が強調されるが、ここで重要なのは「地域」「学校」「幼児児童生徒」という三つの次元(変数)で「実態等に応じて」(三次元方程式を解く)とき

れていること。すなわち、生活する場、学ぶ場、学ぶ人という三つの変数それぞれの多様性を積極的に位置づけ、それを生かす教育課程の創造が求められていると考える。

ただし、このこと自体はすでに現行の学習指導要領の総則の最初に「各学校においては」とあるように、指摘されてきたことである。だが、実際にはすべての学校に共通する教育課程を優先する傾向を変えるまでにはいたらなかった。だが、今回は変えざるをえない条件が付帯しているようだ。それが表2の(2)の部分。

これまで、学校独自の教育課程の編成の必要性を認めても、教科や時間数の枠の制限により、学校とは異なる慣習や時間のもとで営まれる地域の“ヒト、モノ、コト”の活用をためらう傾向がなかったか。だが表2の(3)に示すように、

内容の大綱化、時間運用の弾力化、選択履修幅の拡大、さらに何よりも「総合的な学習の時間」の創設により、各学校による創意工夫を保証する条件は整った(外堀は埋められた?)。

ではどのように具体化すればよいか。その観点が表2の(3)にある。三点に要約できよう。

①幼児児童生徒が家庭や地域社会において行った体験や活動を生かすこと

これが先に「教師自身が子どもたちと学校の内と外の日常を共有」することを強調した理由である。地域の特性を生かした教育課程とは、従来の社会科地域学習の副読本に代表されるような、教師の教えやすさを基準に県下一斉に使用する、といった方法では困難と考える。

それぞれの学校で、その学区という地域で生活する子どもたちの成長にふさわしい学

校・学年・教室独自の教材を開発できるかどうかが課題である。理由は、子どもたちはそれぞれ異なった個性をもつ存在であり、そのよさを伸ばすためには、その子たちが生きる世界の独自性の把握とセットになった教育課程が求められるからである。しかし、これは学校の教師のみでは不可能である。そこで、以下の二点が求められてくる。

②家庭や地域社会の人材・施設や様々な活動との連携を図った教育活動の展開

冒頭で紹介したように、現在、まさに地域を基盤にした学習活動は多種多様に展開されている。また特別な人でなくとも、学校で子どもたちの前に出ることによってすばらしい先生に変身する方も多い。地域の教育力はすでにあるものではなく、創るものである。さらには、「生きる力」の育成の観点からみれば、地域で生活する(働く)姿自体が学びの対象となる。子どもにとって地域のすべての人が教師であり、学校の教師は、その多様な人たちと子どもたちの間の縁を結ぶコーディネーターとなる。

③家庭・地域社会との連携と開かれた学校づくりの推進

いかに学校と教師が変わろうとしても、家庭と地域社会の協力をえなければ不可能である。そのためには、このような変化を必要とする背景も含めて、家庭や地域社会の人たちが理解できる情報の開示と学習の場を積極的に設ける必要がある。そしてその場が、上記のような新たな教育課程の創造を支える人たちのネットワーク化への第一歩になるはず。

家庭や地域社会の理解が進まない(非協力を問題にする前に、学校がまず家庭や地域に開くことから始めてほしい。そして、子どもとともに、学校の内と外に新たな学びと育ちの場を創造する過程で、教師が子どもたちの家族や学区で働く人(教師もその仲間)と三つの縁を共有する地域の人に学び育とうとするなら、教育課程は自ずと地域の特性を生かしたものになると考える。

## 教育開発研究所

### ボードレスシリーズ

全6巻  
定価 本体2233円+税

- |  |   |  |
|--|---|--|
| <p>Ⅲ 性の問題行動と指導<br/>●女子中・高生の問題行動の背景と実態<br/>〔監修・編集〕坂本昇一</p>            | <p>Ⅱ いじめ指導マニュアル<br/>●「いじめ」への対処法を具体的に提示<br/>〔監修〕坂本昇一〔編集〕高階玲治</p> | <p>Ⅰ 総点検・新学力観に立つ生徒指導<br/>●生徒指導の課題を教育課程から総点検<br/>〔監修〕坂本昇一〔編集〕大石勝男</p> |
| <p>Ⅵ 学校経営評価の実践課題と対応<br/>●斬新な68観点による経営評価が大反響<br/>〔監修〕永岡 順〔編集〕平沢 茂</p> | <p>Ⅴ ティーム・ティーチングの技術<br/>●TTを実践するための問題解決学習<br/>〔監修・編集〕加藤幸次</p>   | <p>Ⅳ 登校拒否指導マニュアル<br/>●登校拒否のタイプ別指導マニュアル<br/>〔監修〕坂本昇一〔編集〕高階玲治</p>      |

はじめに .....河野 重男/中野 重人・9

## I なぜ、今「特色ある教育課程」か

- 1 新しい学校づくりと教育課程の工夫 .....中野 重人・12
- 2 教育課程編成の基本事項は何か .....日台 利夫・16
- 3 なぜ特色ある教育課程が求められるのか .....新富 康央・20
- 4 特色ある教育課程にはどのようなものがあるか .....寺尾 慎一・24
- 5 特色ある教育課程はどこまでできるか .....倉澤 達雄・28
- 6 特色ある教育課程の課題は何か .....村川 雅弘・34

## II 特色ある教育課程をどう編成するか

- 1 特色ある教育課程編成の手順と方法 .....工藤 文三・40
- 2 地域の実態を生かす教育課程の編成 .....馬居 政幸・46
- 3 特色ある教育課程の編成と校長・教頭のリーダーシップ .....小林 毅夫・50
- 4 特色ある教育課程と校内の研修体制 .....廣嶋憲一郎・54

## III 特色ある教育課程をどう実施するか

- 1 特色ある教育課程の実施上の留意点は何か .....松田 泰俊・60
- 2 特色ある教育課程の評価と改善をどうするか .....天笠 茂・64
- 3 特色ある教育課程と教師の協力体制 .....津川 裕・68
- 4 地域の協力体制をどのようにつくるか .....水上 義行・72

- 5 特色ある教育課程における健康や安全面への配慮 .....井戸 紀子・76
- 6 保護者の理解と協力をどう図るか .....羽豆 成二・80

## IV 特色ある教育課程の実践事例

### ■小学校■

- 豊かな心をはぐくむ地域の人々との交流〈北海道東神楽町立東神楽小学校〉  
.....安友 進市・86
- NIE 活動による情報活用能力の育成〈福島県福島市立瀬上小学校〉.....高橋 邦広・93
- 地域に根ざした小学校英語学習のあり方〈千葉県成田市立成田小学校〉  
.....佐藤 幸納・100
- 学習内容の見直しを図る関連的学習〈東京都目黒区立中目黒小学校〉.....中村 孝一・108
- 環境を大切に作る心(やさしい子)を育てる環境学習〈東京都目黒区立向原小学校〉  
.....中村 滋・116
- 子どもの自立のために体験を重視した教育課程の編成〈長野県諏訪市立高島小学校〉  
.....細野 祐・123
- 「触れ、慣れ、親しむ」国際理解教育〈愛知県安城市立今池小学校〉.....石原 国基・130
- 地域に生きる伝統文化教育の推進〈岐阜県関ヶ原町立関ヶ原南小学校〉安田 重信・137
- 生涯学習を支える自己教育力を身につけた子どもの育成  
〈京都府京都市立御所南小学校〉.....村上美智子・144
- 帰国子女教育・国際理解教育を核とした教育課程の編成〈兵庫県西宮市立小松小学校〉  
.....山本 幸夫・151

### ■中学校■

- 自主的に学習に取り組む生徒の育成を目指す教育課程の創造  
〈群馬県伊勢崎市立殖蓮中学校〉.....熊井 義子・157